


第158回

ロシアの「核の脅し」 NATOは核戦略の「あいまいさ」で 対抗

有料記事 ウクライナ情勢

オランダ・ハーグ=玉川透 2022年12月23日 10時30分



キルギスの首都ビシケクで2022年12月9日、ユーラシア経済連合首脳会議に出席したロシアのプーチン大統領=ロイター 



ウクライナ侵攻を続けるロシアのプーチン大統領が今月7日、核戦争の「脅威」が高まっていると発言した。核兵器使用はあくまで防衛手段と主張しつつ、再び「核の脅し」をちらつかせる。北大西洋条約機構（NATO）はどう対応するのか。オランダのシンクタンク「ハーグ戦略研究センター」のポール・ファン・ホーフト上級研究員（44）は、核戦略における「あいまいさ」の重要性を指摘する。

——「核戦争の脅威が高まっている」というプーチン氏の発言を、どうみますか？

プーチン氏の核兵器使用をめぐる発言はこれまでも何度かありましたが、以前と比べるとトーンは弱くなっているように感じます。米国は「核を使えば重大な結果を招く」とする以外、大きく反応していません。ドイツをはじめ西欧諸国も今のところ断固とした態度をとっています。

ロシア寄りとされる中国でさえ、習近平国家主席が核の脅威には否定的に語っています。合理的に考えれば、核兵器の使用は限られた軍事的成功しかもたらさず、主要な同盟国との間での大きな政治的失敗をもたらす恐れがあるとわかります。

要するに、プーチン氏ははったりをかました、今のところそれはうまくいっていない。「核の脅し」が期待したほど効果的でないと、彼自身もわかってきたのではないのでしょうか。

——NATO側ではショルツ独首相が8日、国際社会のロシアへの圧力によって核兵器使用の危険性が低下したとの認識を示しました。脅威はひとまず去ったと理解していいのでしょうか？

米国と他のNATO加盟国による一貫した姿勢によって、核の脅しにはメリットが少なく、コストが多いということをプーチン氏にはっきりさせたと思います。

とはいえ、核兵器使用の脅威がなくなったわけではありません。プーチン体制の存続が脅かされた場合、再び核の脅しを強める可能性はあります。たとえば、当面はあり得ないでしょうが、ロシアがウクライナ東部やクリミア半島のコントロールを完全に失った場合などが考えられます。

NATOとしては今後も、ロシアが核兵器を使用すれば重大な結果になると強調しながら、緊張をエスカレートさせず、同時に妥協や譲歩もしないという戦略を堅持していくことになるでしょう。

——ウクライナはNATOに加盟していません。万一ロシアがウクライナ領内で核兵器を使用した場合、NATOはどう対応するのでしょうか？

NATOには、加盟国が核兵器による安全保障と責任を分かち合う「核シェアリング（共有）」の仕組みがあります。冷戦期、有事の際に米国が本当に核兵器を使ってまで欧州を防衛してくれるのか、保証を求めた加盟国の要請をうけたものです。もしロシアが核兵器を使用すれば、NATOはこの枠組みに基づいて、フランスをのぞく29加盟国が参加する「核計画グループ」（NPG）で対応を協議することになるでしょう。

ただ、実際には最終決定は米国大統領の手に委ねられています。現在、欧州にはイタリア、ドイツ、オランダ、ベルギー、トルコの5カ国に計約100発の戦術核爆弾が配備されていますが、それらはすべて米国のものです。NATOはNPGで対応を協議し意思決定もしますが、核兵器で応戦するかどうかの最終決定は、米国大統領がどう考えるかにかかっているといえます。

——NATO内では、フランスと英国も核兵器国です。マクロン仏大統領は10月、ロシアがウクライナや周辺地域で核兵器を使用しても、「フランスが核で反撃する事態には当てはまらない」と明言しました。

フランスと英国は、基本的に自国や同盟国が攻撃を受けた場合に核兵器の使用を検討します。とくにフランスはNATOのNPGに参加しておらず、伝統的に独自の道を歩んでいます。マクロン氏としては核兵器を使う以外に選択肢のない状況に追い込まれたいくなかったのが、あのような発言をしたのでしょう。フランスの立場には、ロシアをそこまで追い詰めず、緊張をエスカレートさせたくないというメッセージ性を感じます。

しかし、（どんな基準で核兵器を使うか、わざと明言しないでおく）「あいまいさ」を重視するNATOの核戦略からすると、マクロン氏の発言はあまりに態度を明確にしすぎたと批判を受け

ました。フランスも核兵器を使うかもしれない、とロシアに思わせておいた方が核抑止という点で有利だからです。

——NATOが重視する核戦略の「あいまいさ」とは、どういうことでしょうか？

奇妙な言い方ですが、ポーカー・ゲームなどの心理戦に近いかもしれません。核戦略では、核兵器に対する恐怖心が重要な要素になります。相手がもしかしたら核兵器を使うかもしれない。仮に使えば、核戦争になりかねず、互いに被害は甚大です。敵が心の中に抱く恐怖心をうまく操らなくてはなりません。敵に不確実性や恐怖心を与えて行動をやめさせようとするわけです。ただし、その場合、敵にあまりに危険だと思われてもいけない。

——恐怖に駆られて敵が暴発してはいけないからですね。

そうです。常にある程度、危険な存在だと思われつつ、危険すぎることはしない。そんなあいまいさが重要なのです。一方で、仲間に対しては合理的でなければならない。ただし、敵に手の内がわかってしまうほど合理的であってもいけない。カードを持つ相手の目の中に、どれだけ狂気が宿っているか。それを見極めなくてはならないのです。やり過ぎず、それでいて少なすぎず、少しあいまいにしておくぐらいがちょうどいい。そんな駆け引きが必要になります。とくに今回はウクライナが非加盟国であるという要素が入ってくるので、さらに難しくなります。

——プーチン氏の恐怖を操ることができるのでしょうか？

プーチン氏の頭の中はだれにもわかりません。ただ、ロシアがウクライナ領内で核兵器を使用するという一線を越えた場合でも、NATOには多くの選択肢があります。それは、ロシアが本当に都市を破壊するのか、あるいは空中で爆発させるだけなのか、汚い爆弾を使うのか、どのような形で使用するかにもよります。その結果によっては、NATOは通常兵器で一段上の対応に踏み切ることもできるでしょう。たとえば、黒海艦隊への攻撃やロシアのミサイル発射基地を破壊するといったことも考えられます。これまで避けてきた、ウクライナ上空に「飛行禁止区域」を設定するという可能性もあります。ロシア軍の空爆を制限できますが、それはロシアとの直接対決を意味するので避けたいところでしょう。（オランダ・ハーグ=玉川透）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.